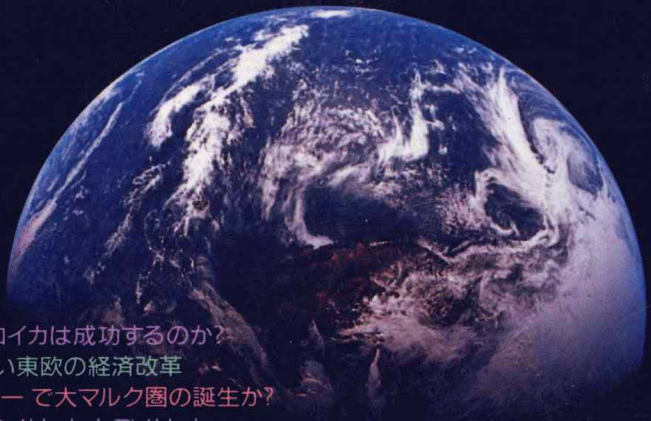
素朴な疑問にズバリと答える

これからの世界経済

竹内宏&長銀経済研究会



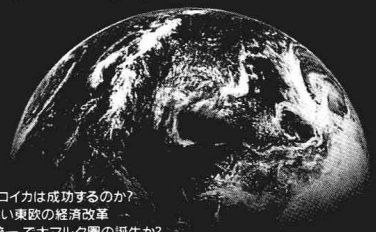
- ペレストロイカは成功するのか?
- 容易でない東欧の経済改革
- ドイツ統一で大マルク圏の誕生か?
- EC統合のメリットとデメリット
- アメリカ経済は再生するのか?
- イラクがクウェートに侵攻した理由
- 第三次石油危機は発生するのか?
- OPECの原油支配は拡大するのか?
- 中国の実権は誰が握るのか?
- 香港は衰退するのか?
- 開放政策はこれからも続くのか?
- 朝鮮が統一する可能性はあるのか?
- ASEANの成長はNIESさえも抜く?
- 日本経済の成長は続くのか?
- 土地の値段は下がるのか?
- 日本に政治変動が起きる可能性はあるのか?

日本実業出版社

素朴な疑問にズバリと答える

これからの世界経済

竹内宏&長銀経済研究会



- ペレストロイカは成功するのか?
- 容易でない東欧の経済改革
- トイツ統一で大マルク圏の誕生か?
- EC統合のメリットとデメリット
- アメリカ経済は再生するのか?
- イラクがクウェートに侵攻した理由
- 第三次石油危機は発生するのか?
- OPECの原油支配は拡大するのか?
- 中国の実権は誰が握るのか?
- 香港は衰退するのか?
- 開放政策はこれからも続くのか?
- 朝鮮が統一する可能性はあるのか?
- ASEANの成長はNIESさえも抜く?
- 日本経済の成長は続くのか?
- 土地の値段は下がるのか?
- 日本に政治変動が起きる可能性はあるのか?

日本実業出版社

竹内　宏(たけうち　ひろし)
1930年，静岡県生まれ。1954年，東京大学経済学部卒業後，日本長期信用銀行入行。同行の専務取締役を経て，現在は長銀総合研究所理事長兼日本長期信用銀行顧問を務める。その間，東京大学と武蔵大学の講師も務め，〝実感派エコノミスト〟としてまさに東奔西走の活躍。主な著書に『路地裏の経済学』(日本経済新聞社)、『竹内宏のちょっとエコノミー』(講談社)など多数がある。

これからの世界経済

1990年11月30日　初版発行
1991年1月30日　第2刷発行

著　者　竹内　宏&長銀経済研究会

発行者　中村洋一郎

発行所　株式会社 日本実業出版社　東京都文京区本郷3丁目2番12号 〒113
☎代表 03(3814)5161　振替 東京7-25349
大阪市北区西天満6丁目8番1号 〒530
☎代表 06(362)6141　振替 大阪2-17558

印刷／厚徳社　製本／若林製本

© 1990 Printed in JAPAN
ISBN4-534-01660-3

落丁・乱丁本は，送料小社負担にてお取替え致します

世界経済の「素朴な疑問にズバリと答える」――まえがきにかえて

一九九〇年八月二日、イラクがクウェートに侵攻しました。

この事件の影響を受けて、株式市場は暴落し、多くの人が損を被ったのをはじめ、石油製品の値上がりによって、私たちの生活にも支障が出ました。

イラクは、日本から八〇〇〇キロメートルも彼方にあります。そんな遠くの出来事なのに、私たちの生活に瞬時にかかわってくるのが、現代の特徴といえるでしょう。

日本から遠く離れた世界の出来事が、日本の経済に直接的に響いてくる。また、日本のコメ政策がアメリカから注文をつけられたように、日本の国内問題も海外から関心を呼んでいます。まさに世界各国は密接に結びつき、お互いの経済に影響し合っています。

しかもいま、激動しているのは中東ばかりではありません。

ソ連・東欧では市場経済が導入され、ヨーロッパでは東西ドイツが統一しました。アジアＮＩＥＳの発展ぶりには目を見張るばかりですし、朝鮮半島の統一問題も風雲急をつげています。これらの出来事も、私たちの暮らしに影響を与えずにはおかないでしょう。

本書は、世界で起きているさまざまな経済の変化を、各国・各地域ごとにまとめ、事態が生じた

背景と将来の予測をわかりやすく解説したものです。

経済の解説書といえば、とかく数字が出てきて、大所高所からの説明が通り相場です。しかし、本書は生活者の感覚を大切にしながら、誰もが思い浮べる素朴な疑問にズバリと答える、という方針で編集しました。とくに〝これからどうなる〟という点に焦点を当てています。世界の動きを知るのに大いに役立てていただけるものと思います。

本書をお読みになる際は、最初から通してでも結構ですが、興味ある地域・国々から拾い読みされてもかまいません。手近に置いて、ご活用いただければ幸いです。なお、欄外の脚注は、編集部で付したものです。理解にお役立てください。

＊　＊

本書は、世界の出来事をわれわれ庶民の感覚で判断いただける竹内宏先生に、序文の執筆と全篇への助言をお願いしました。また、各章は日本長期信用銀行のそれぞれの専門の方々にご健筆をふるっていただきました。

末筆ながら、ここに感謝申しあげるとともに、広く読者のみなさんにその成果をご覧いただきたいと存じます。

一九九〇年一一月吉日

日本実業出版社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

これからの世界経済

CONTENTS

いま世界経済はどう動いているのか ―― 13
●竹内　宏

1章

共産主義の理想を失い、ソ連はどこへ行く

第1講●ゴルバチョフはなぜペレストロイカを始めたのか——32
第2講●改革の行き詰まりが伝えられるなかで、ソ連経済はいまどんな状態にあるのか——38
第3講●ソ連はどんな方法で経済を立て直そうとしているのか——44
第4講●東欧は見捨てられる？　ソ連の対外関係はこれからどうなる？——48
第5講●頼るはアメリカ！　米ソ友好関係のもとに、新秩序が築かれる——54
第6講●九〇年代の日ソ関係はどう進展するのか——58
ONE POINT LECTURE●経済改革「五〇〇日計画」36
●日ソの狭間にゆれる北方領土の歴史 52
COLUMN●計画経済と経済計画 43
●サービス精神は根づくか？ 62

2章

歴史的大変革を経験した東欧経済のゆくえ

第1講●変革はどのように始まり、課題として何が残ったのか 66
第2講●いま東欧経済は、どんな状態にあるのか 72
第3講●必死に取り組む経済改革に、成功の見込みはあるのか 78
第4講●東欧はどこへ行く　日本との関わりはどうなる? 82
ONE POINT LECTURE●姿を消すコメコン貿易 70
COLUMN●チャウシェスクは外交の天才!? 77

3章

新秩序を模索する西欧経済のゆくえ

第1講●大マルク圏の誕生か？「ドイツ統一」で何がどう変わる？——90
第2講●旧政治体制はどうなる？イギリス、フランス両大国のゆくえ——96
第3講●新興勢力——スペインとイタリアの経済復興はなぜ起きた？——102
第4講●日本が引き金!?　ECはなぜ統合するのか——108
第5講●国の主権はどうなる？　EC統合で何がどう変わる？——112
第6講●さらに拡大か？　日本からの対欧投資はこれからどうなる？——120
第7講●二〇〇〇年には「大欧州」が出現する!?　思惑乱れるヨーロッパの未来像——124
ONE POINT LECTURE●自力で回復を図る半導体産業　118
COLUMN●ドイツへの進出の損得勘定　107
●EC各国の対日自動車戦略　130

4章

アメリカ経済は衰退するのか復活するのか

第1講●「騒々しい八〇年代」――レーガノミックスを振り返る――134
第2講●アメリカ社会はどうなる？方向性を示す六つのトレンド――142
第3講●アメリカは衰退するのか、それとも再生するのか――150
第4講●「メイド・イン・USA」は残るか産業の競争力を占う――160
第5講●連邦と州の関係が見直される？　変貌する地域経済――168
第6講●ポスト冷戦時代を迎えて、アメリカの対外政策はどうなる？――176
第7講●新システムの構築を模索する、これからの日米関係――182
ONE POINT LECTURE●二〇〇〇年のアメリカ経済の姿　174
COLUMN●世論調査にみる対日感情　159
●アメリカ〝州物語〟　167

5章

原油がすべてを左右する中東経済のゆくえ

第1講●中東の新たな火種
イラクはなぜクウェートに侵攻したのか ―― 190
第2講●われわれには馴染みの薄い中東とは、どのような地域なのか ―― 194
第3講●世界的な緊張緩和が進む中で、
なぜイスラエルとアラブは対立するのか ―― 198
第4講●イスラム教は政治や社会にどれほど関わっているのか ―― 204
第5講●石油に左右される中東経済は、どんな問題を抱えているのか ―― 208
第6講●先進工業国が恐れる第三次石油危機は発生するか ―― 214
第7講●どっこい生きていたオイル・マネーの知られざる力 ―― 218
第8講●自らが巨大メジャーに変身しつつある
OPECの九〇年代総合戦略 ―― 224
第9講●深刻な累積債務問題は解決されるのか ―― 228
ONE POINT LECTURE●ユダヤ人は世界経済を牛耳っているのか? 202
●アラブ諸国の外国人労働者問題 222
COLUMN●酒とベリーダンスそしてハレム 213

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

6章

底知れぬ可能性を秘める中国経済

第1講●中国経済を左右する権力構造は、これからどうなっていくのか 236
第2講●香港の衰退は中国政府も容認している? 242
第3講●対外開放政策とはどのようなものなのか 248
第4講●三年間ガマンすれば成功する中国での合弁事業 252
第5講●八億人が生活する農村部はこれからどうなっていくのか 258
第6講●経済改革は成功したのか失敗したのか 262
第7講●東欧で起きた民主化運動は中国で起きる可能性はあるのか 268
第8講●中国経済は成長するのか衰退するのか 272
ONE POINT LECTURE●中国政治における人民解放軍の役割 256
●上海浦東開発計画 266
COLUMN●鄧小平後の中国 247
●国営企業城下町の実態 276

7章

世界の債権国となるNIESとASEAN

第1講●米ソ冷戦構造の終結は、アジア諸国にどんな影響を与えたのか 280
第2講●世界が驚くほどの経済発展を、なぜアジア諸国は遂げられたのか 284
第3講●シンガポール・香港経済はこれからどうなっていくのか 290
第4講●日本の隣に先進国が登場する？　発展著しい韓国経済のゆくえ 294
第5講●つねに大陸を意識する台湾は、これからどうなる？ 300
第6講●構造転換が順調に進むタイとマレーシア 306
第7講●政情不安を抱えるインドネシアとフィリピンは、これからどうなる？ 310
第8講●世界の債権地域となるアジアに、日本はどのように関わっていくのか 316
ONE POINT LECTURE●経済統合へと歩むASEAN 288
COLUMN●北朝鮮はいま 299
●アジア・太平洋地域の発展を荷なうAPEC 314
●東南アジアの華僑社会 305

8章

これからの日本経済に何が起きるのか

第1講●日は昇るのか沈むのか　九〇年代の経済成長はどのくらい？ 324
第2講●産業構造の大転換で脚光を浴びる産業は何か 328
第3講●これ以上、税金はとられたくない！　消費税、土地税制はどうなる？ 334
第4講●誰もが儲けたのは夢のまた夢　株価と地価のゆくえ 340
第5講●「これ！」という打解策もなく、東京集中は続くのか 346
第6講●休日は本当に増えるのか？　会社生活はこう変わる！ 352
第7講●変革の嵐は日本にもやって来る　政治変動のかすかな兆し 360
第8講●いよいよ世界に乗り出す日本　対外関係はどう変わる？ 364
ONE POINT LECTURE●これからも出生率の低下は続くのか？ 338
●地球の環境を考える 358
COLUMN●石油危機と日本 333
●海外直接投資は増えるか？ 345

9章

絵で読む 2000年の世界経済

第1講●世界経済はどう変わるのか？ 370
第2講●世界貿易はどう変わるのか？ 374
第3講●資本の流れはどう変わるのか？ 378
第4講●原油事情はどう変わるのか？ 382
第5講●貧困問題はどう変わるのか？ 386
第6講●企業の国際化はどう進むのか？ 390
第7講●軍事費はどう変わるのか？ 394
第8講●熱帯雨林はどう変わるのか？ 398
第9講●世界人口はどう変わるのか？ 402

＊カバー装丁／坂井哲也　＊レイアウト／小倉敏夫　＊トレース／渋川泰彦・ダーツ

＊イラスト＆コラージュ／つのださとし・中山隆右・橋本金夢

いま世界経済はどう動いているのか

竹内 宏

■ソ連には経済改革のためのソフトもハードもない

世界が大きく変わっています。戦後、米ソは互いに覇権を競いあい、軍事費を拡大した結果、軍事上はいざ知らず、経済的には両国とも完全に疲弊してしまいました。

アメリカの病は財政赤字と貿易赤字の、いわゆる「双子の赤字」です。このうちどちらが深刻かというと、財政赤字です。財政赤字の結果、国内需要が強くなり、その需要を埋めるため海外からものを輸入しました。これにより膨大な貿易赤字が発生し、世界最大の債務国に転落したわけです。では、財政赤字はなぜ発生したかというと、多大な軍事支出があったからです。

アメリカよりひどい状態にあるのがソ連です。ソ連の対ＧＮＰの軍事支出は一五％を超えています。四〇〇万人もいる軍隊が、工場で一生懸命働いていればいいのですが、いまは兵役に就いているので、これだけでもかなりの財政負担になっています。

さらにソ連では、ハイテク技術にたいへんな遅れが生じています。とくにアフガン戦争以降、自由主義諸国がココムによる輸出規制を強化したため、これら技術がほとんど入って来なくなりました。

そのうえソ連は、中央集権的な計画経済を実施しています。計画経済とは物量が重視されますから、数量と重さ、つまり目方と大きさに関心がいくわけです。これにノルマが加わります。そこで企業がやることといえば、原材料を調達して、目方と大きさのノルマを達成する製品をつくり出すことです。ですから、世界最大の目方をもつテレビができあがったりするわけです。このようなことをしていては、経済が弱くなっても仕方がないでしょう。

そこで経済再建のため、ソ連が考え出した方法が、東欧諸国を手放すことです。

ソ連は世界最大の原油産出国であり、輸出国です。いままでは東欧諸国にこの安い原油を売ってルーブル建ての債権を作り、東欧諸国からはあまり品質のよくない工業製品を買っていました。これではソ連としては割に合いません。できればこの原油を自由主義諸国に売り、それによってハードカレンシー（ドル）を手に入れ、手にしたドルですぐれた機械製品を買いたい、と思ったわけです。

そこでソ連は東欧を手放しました。しかも軍縮でいろいろな提案をし、ソ連が恐い国でないと世界各国に認めてもらい、ココムによる輸出制限を緩めてもらおうとしたのです。

それと同時に、中央集権的な経済体制を分権的なものにしていく、つまり自由体制というか、プライスメカニズムを導入しようとしています。

ところが、中央集権的な国家が、急に自由体制的な政策をとり入れようとしても、ことはそう簡単ではありません。自由体制に必要なハードウェアもソフトウェアもないからです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com